

地域スポーツ集団のコミュニティ活動に関する一考察
～大府市「とうちゃんソフトボール」の事例より～

金子守男* 守能信次*

A Study on the community activities of Sport Groups
～The case of “TOUCHAN (DADY's) Softball” in OHBU city～

MORIO KANEKO , SHINJI MORINO

The purpose of this study is to clarify the realities of the cooperation with community activities of the “TOUCHAN softball” groups, small community sport teams which exist mainly in LHBU city.

The results of study were as follows :

1. “TOUCHAN softball” groups cooperate with commnitiy activities under the local governmint’s guidance. Those cooperation does not occur from thier own free will, but from the request of self-governing body.

2. These sport groups are involved in the community activities, that is, they were exploited by the municipal administration or the self-governing body. But in cooperating with community activities, it was recognized that “TOUCHAN softball” groups were assumed as an important part of community organization in OHBU city.

1. 研究の目的

体育社会学の研究分野や地域社会体育行政で、コミュニティ・スポーツ論が展開されるようになった社会的背景には、高度経済成長による都市化現象の進行がもたらした地域共同体の崩壊、あるいは地域共同体の崩壊に対処するための国や自治体のコミュニティ形成施策があったといえる。また、このコミュニティ・スポーツを対象とした研究は、体育社会学の研究分野の中でも基本的なテーマとしてあるばかりでなく、これらのスポーツ活動がコミュニティ形成に貢献しようといった期待からも、従来より重要視されてきたものと思われる。

こうしたコミュニティ・スポーツや地域スポーツを対象にした先行研究を検討していくと、その内容は、おおきく次の3つの領域に分かれるものと考えられる。すなわち、1) 体育学¹⁾²⁾ 的な関心から、定期的に活動を続けているの活動実態を記述した研究領域。2) スポーツ集団³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾ の存続や発展、または変容の過程を記述したり、あるいは、この3者を規定する要因を分析した研究領域。そして、3) 社会学的⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾ な角度から、地域スポーツ集団の社会的な機能を明らかにしようとした研究領域である。

中でも本研究と関係のあるのは、最後に述べた領域であるが、この領域における先行研究は、近隣交流やコミュニティ意識そしてコミュニティ活動への参加・協力といった観点から地域スポーツ集団の社会的機能の考察が行われている。特に、スポーツ集団のコミュニティ活動への協力の実態については、その協力頻度やメンバーのスポーツ集団加入後のコミュニティ活動への関与の変化までは明らかにされているが、スポーツ集団が、地域の様々なコミュニティ活動協力している具体的な理由が明らかにされていないようである。

従って本研究では、まず「とうちゃんソフトボール」団体のコミュニティ活動の協力頻度を明らかにし、次いで、このレクリエーション・スポーツの集団がコミュニティ活動へ参加や協力をするに至るまでの過程や、そこでの問題点を明らかにすることを目的としている。

2. 研究の方法

本研究の研究資料を得るために、昭和61年6月末から7月のなかばに至るまで、「コミュニティ・スポーツ振興のための基本調査」と題するアンケート調査を、大府市における「とうちゃんソフトボール」

参加者を対象に実施した。調査票は、チームの責任者用と選手用を用意した。それぞれの調査項目は以下のようである。

- 1) チームの責任者用の調査項目
 - ① チームの属性（チーム結成後の継続年数、結成時のメンバー数、性別チーム構成、年齢別チーム構成等）
 - ② チーム加入制限
 - ③ チーム財政
 - ④ チーム活動内容
 - ⑤ チーム施設
 - ⑥ チームのコミュニティ活動への協力頻度、協力理由、協力頻度に対する意見
- 2) 選手用の調査項目
 - ① 社会的属性（年齢、性別、学歴、職業、大府市居住年数等）
 - ② 近隣交流
 - ③ コミュニティ活動への協力頻度
 - ④ コミュニティ意識
 - ⑤ チーム意識

調査票の配布、回収、有効回収数は表1の通りである。

表1. 調査票の配布数・回収数・有効回答数 部数 (%)

チームの責任者			チームメンバー		
配布数	回収数	有効回答数	配布数	回収数	有効回答数
102	84 (82.4)	84 (100)	2040	1562 (76.6)	1353 (86.6)

3) 研究の方法

チームと個人の協力頻度、チームのコミュニティ活動への協力理由、及び協力頻度に対する意見の集計結果、そしてチーム責任者の自由記入方式によるコミュニティ活動に対する意見から考察を進めた。

3. 結果と考察

「とうちゃんソフトボール」は、地域住民の親睦と体力の向上を目的に、昭和50年、愛知県大府市の、ある小学校区において始められた。昭和51年から大

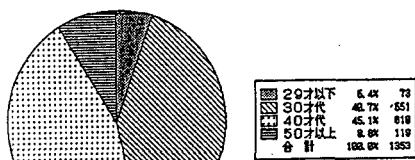


図1-a. 年齢

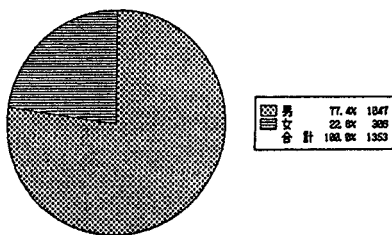


図1-b. 性別

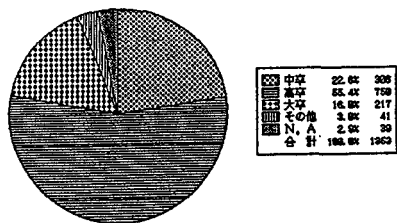


図1-c. 学歴

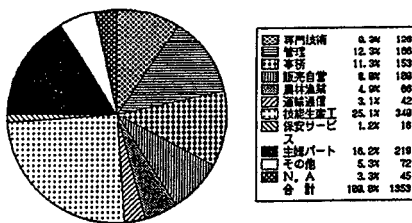


図1-d. 職業

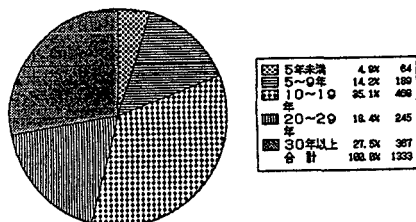


図1-e. 大府市居住年数

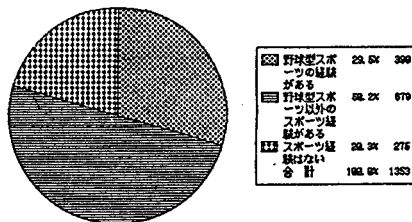


図1-f. スポーツ経験

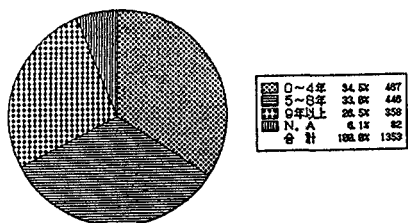


図1-g. チーム継続年数

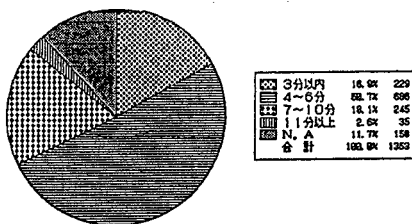


図1-h. 試合場までの所要時間

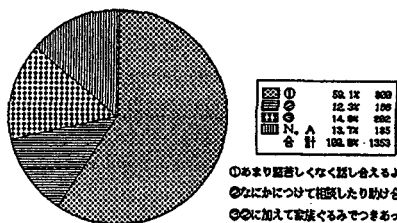


図1-i. チームメイトとのつきあいの程度

◎あまり堅苦しくなく話し合えるようなつきあい
 ○なにかにつけて相談したり助け合えるようなつきあい
 ○に加入して家族ぐるみでつきあっている

図1. 参加者の特性

府市全域において「とうちゃんソフトボール」が開始されるようになり、その3年後には、全市レベルでの大会運営を行い、またこのスポーツ集団の相互の連絡を図るための組織としては「連絡協議会」がつけられるに至った。こうしてこの地域スポーツ活動は、関係者の間で自主的な運営が行われるようになっていく。

「とうちゃんソフトボール」チームは発足以来、年々そのチーム数を増やしていき、現在は101チームを数え、更に同市と隣接する東海市、知多市にまで普及している。

このスポーツ活動の特徴として、チームが既婚者の近隣集団で構成されていること、更に、ゲームにおいては、男子40歳以上3名及び女子2名を常時出場させること、打てる可能性を高めるために、ソフトボール・ルールに改訂が加えられていることなどをあげることができる。こうしたゲーム時におけるメンバー規定や、打ちやすさを保証したルールにより、社会人になってからチームに加入するまで野球型スポーツの経験がなかった人たちが(図1-f)、家庭の主婦をもゲームに参加させることが可能となった(図1-b)。特に女性の参加により、夫婦でゲームに参加し、子供たちが応援をするといった光景も見られ、こういった意味では、「とうちゃんソフトボール」はファミリー・スポーツとしての要素も備えている。また、参加者の年齢(図1-a)や学歴(図1-c)あるいは職業(図1-d)は様々であり、こういったいろいろな人たちが、スポーツ活動を行うた

めに、比較的近くにある小学校のグラウンドに集ってくる(図1-h)。しかもスポーツ活動を離れた場でも、参加者同士が何らかの相互接触の機会を持っていることを考えれば(図1-i)、この「とうちゃんソフトボール」は典型的なコミュニティ・スポーツであるといえる。

試合を行うことが中心となるこのスポーツ活動では、それぞれのチームは3~7月そして9~11月のシーズン中に、7つの小学校区別にリーグ戦を、1週間あたりほぼ1回のペースで消化していくが(図2-d)、この試合の時に集るメンバーは、12~15人くらいである(図2-e)。大府市の「とうちゃんソフトボール」は発足以来、今年で12年目になるが、チーム結成後8年以上を経過しているチームが約70%あり(図2-a)、結成時のメンバーもかなり多い(図2-c)。1チームが20人前後であることや(図2-b)、参加者の高齢化(図1-a)、更にはチームに長年所属している参加者の多い傾向を考慮すると(図1-g)、チームメンバーのほぼ固定された、流動性の低いチーム像が窺える。同時に、このことと試合を離れた場でもチームメートとのつきあいがあることを考えれば(図1-i)、ほとんどのチームの活動目的であるチーム内の親睦が達成されているようであり、更に、こうしたチームの集ってくるスポーツ活動の拠点は、大府市における新旧住民の交流(図1-e)、及びレクリエーションな交流の場ともなっているようである(図2-f)。

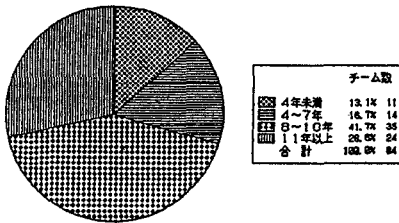


図2-a. 結成後の結成年数

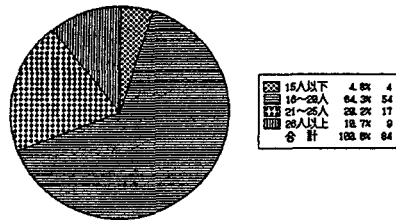


図2-b. メンバー数

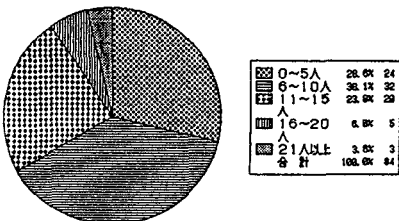


図2-c. 結成時のメンバー数

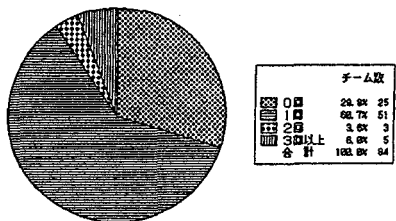


図2-d. 1週間のゲーム数

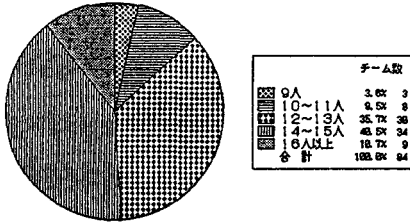


図2-e. 試合に集まるメンバー数

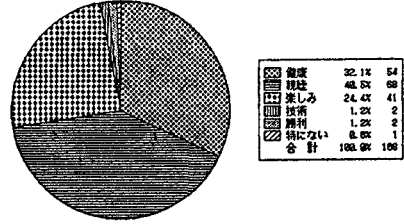


図2-f. 活動目的(7つの選択肢より2つを選択する回答方法より)

図2. チームの特性

次に、参加者の地域のコミュニティ活動への協力実態であるが、図3-aに示すとおり、各種のコミュニティ活動にチームとして協力する割合にはかなり高いものがある。例えば、「地域スポーツ関係の行事」では約90%のチームが「よく協力する」と回答しており、また4群のうち最も協力頻度の少ない530(ゴミゼロ)運動や公園の清掃といった「美化作業」においても「たまに協力する」を含めると、約70%のチームが協力していることになる。こうしてチームが各種コミュニティ活動に協力する頻度を見ていくと、コミュニティ活動と関わりを持たないチームは少ないことがわかる。一方、チームメンバー個人の場合については図3-bにみるとおり「よく協力する」人の比率は、「スポーツ関係の行事」についてが最も多く、「美化作業」がそれに続いている。

チームとしてコミュニティ活動に協力する理由は、図4に見るように、「市や自治会から依頼がある

ため」が25%、「連絡協議会から依頼があるため」が約40%となっているが、このことは、市や自治会がコミュニティ活動を行う際に、「とうちゃんソフトボール」チームに協力依頼があり、更には、この協力依頼の際に「とうちゃんソフトボール」大会の運営や参加チーム相互の連絡調整を行うことが目的であるはずの「連絡協議会」が、行政側から各チームへの連絡ルートとして利用される傾向のあることを示唆している。このように「とうちゃんソフトボール」チームは、市や自治会からの協力依頼が「連絡協議会」のメンバーを通して伝わることにより、コミュニティ活動に協力するのであるが、図5に見るかぎりコミュニティ活動への協力頻度は、「現状のままでよい」とするチームが約65%としてあり、前述したような形でのコミュニティ活動への協力に不満を持つチームは少ない。

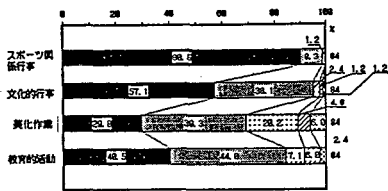


図3-a. チームのコミュニティ活動協力頻度

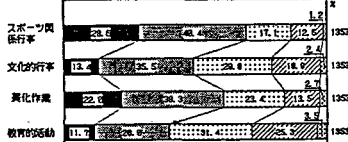


図3-b. 個人のコミュニティ活動協力頻度

よく協力する たまに協力する あまり協力しない 全く協力しない N, A

図3. コミュニティ活動の協力頻度

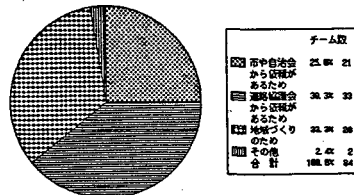


図4. コミュニティ活動の協力理由(チーム責任者の回答より)

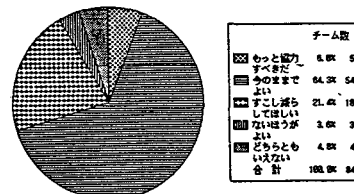


図5. コミュニティ活動の協力頻度に対する意見(チーム責任者の回答より)

表2. チーム責任者のコミュニティ活動に対する意見（自由記入方式による回答）

- A. 学区の町づくり組織が、とうちゃんソフトボール組織を利用しようとするとき、とうちゃんソフトに相談なくきめつけてくることが多く、このことがとうちゃんソフトボール組織として動くとき不満の種となっているようだ。始めから話し合いの中に入った形で協力の要請があるべきで、この方が動きやすい。
- B. コミュニティ活動への協力のあり方……協賛主旨の不明確なものに対する参加、分担が高い。
- C. 練習日での統一的練習の難しさ……出席率とチームワークプレー練習特にないが、ソフトボール団体が地域の行事に対して協力が多いきらいがある。
- D. ソフトボールに関係のない行事への参加があまりにも多い。あくまでもソフトボールがやりたくてチームに入ったので、そういう行事への参加は本意ではない。
- E. ソフトボールを通じて、コミュニティと非常に深い関わりを持っています。役員を1つ取っても市議員はコミュニティの役員は出来なく顧問あつかいである。我々は、市議員は、そんなにえらい者とは思わないし、お客扱いもしない。皆一緒に和となり、コミュニティを通じて地域作りのために協力し、もっともっと理解を高めたい。市議員を、もっともっと、作業員の様に利用すべきだ
- F. 市や自治会の行事、活動を行う際に、あまりにもとうちゃんソフトボール（組織）に対して協力の依頼が多いように思われる。市内、学区内の「コミュニティを図ろう」という考えには賛成ではあるが……。私の地区において意見をいわせてもらうと、各種の行事活動となると、すぐ、とうちゃんソフトに頼めばなんとかしてくれるということで一般市民の方は、非協力的である。悪く言うと便利屋さんみたいな気がする。あるチームの役員をやっていた方は、自治会の役員も兼務していたため、夜、昼（日曜）となく家をあけることが多くなり、しまいにはとうちゃんソフトを退会されたという話を聞いたことがある。執行部の方も考えてほしい。こういう活動は、一般市民の参加が盛り上がってこそそのコミュニティ活動ではないだろうか……。
- G. ①石ヶ瀬学区では、日曜日、自由に使えるグラウンドがない。小学校はとうちゃんソフトボールと少年野球チームの併用（半日づつ）
②以前に比べると区内の行事にとうちゃんソフトが関係する事が多くなったと思う。地域の行事に協力するのは当然だが……。
- H. 特定の役員に役割（行事）が集中する。もう少しお互いに分散して協力しあう体制が必要。
- I. 学区内の町づくりにとうちゃんソフトが参加しているが、サラリーマン・チームのために参加する人が少ない。
- J. とうちゃんソフトを通じて心のふれあいをテーマにしてチームを作り、ソフトを通じて他チームとの交流を行ってきたが、3年前からコミュニティ活動（推進協議会）が地域に生まれ、更に忙しく活動している。
- K. ソフトボールを気楽に楽しみたいと思って参加してみると、チーム内の役員の大切さと又地域の行事と深い関係をもっていることを知りました。問題点としては、技術的に上手な人は、長年続くのに対し、その他の人で脱会されるケースが多いので、チームをまとめる人がどうやってひっぱっていくか、どこのチームにとっても課題かと思えます

表2-a 左の回答で問題とされている事柄

- A. 行政サイドの連絡協議会を連絡ルートとした一方的な協力依頼
- B. 行政サイドの間接的な連絡方法による連絡の不行届
- C. 特定団体の協力によるコミ活
- D. スポーツ集団がコミュニティ活動へ協力することへの矛盾
- E. 同市のコミュニティ活動の現状
- F. とうちゃんソフトボール組織のみに支えられた同市のコミュニティ活動の現状
- G. 自治会の支援団体として位置づけてきたスポーツ組織
- H. 地域行事に非協力的な一般部員
- I. 特定の部員に集中するコミュニティ活動へ協力
- J. スポーツ活動以外の活動による多忙さ
- K. 気軽にできないスポーツ活動

しかしながら、表2.チームの責任者のコミュニティ活動に対する意見を見てみると、「とうちゃんソフトボール」参加者のコミュニティ活動への協力には、かなり複雑な事情がありそうだ。特にここで注目されるのは、チーム関係者がコミュニティ活動に対して様々な促え方をしており、例えば、彼らがコミュニティ活動を「地域の行事」とか「市や自治会の行事」あるいは「ソフトボールに関係のない行事」と呼んでいることである（回答C,D,F,G,Kを参照）。本来、地域住民がそれぞれのニーズに応じて自発的に活動を展開するのがコミュニティ活動であるとするれば、彼らはそれを、同市や自治会が主唱するあくまでも他律的な「行事」として捉えている。中でも、回答Aの「学区の町づくり組織が何らかのコミュニティ活動をやろうとすると、とうちゃんソフトに相談なく始めからその参加を決めつけてくることが多い。……」という意見に代表されるような、自治会から「とうちゃんソフトボール」チームに対する一方的な協力依頼、また回答Bの「チームが協賛主旨の不明確な行事に参加することが多い。」との意見、あるいは回答Gの②の「以前に比べると学区内の行事にとうちゃんソフトが関係することが多くなった……。」等の意見は、「とうちゃんソフトボール」関係者にとって、地域住民の自発的活動であるはずのコミュニティ活動が単なる「行事」であったり、定期的に行われるある種のチーム活動としてあるばかりでなく、「とうちゃんソフトボール」団体が、市や学区のあらゆる行事を行う際の支援団体であることを明確にするものと思われる。

同市でいわれているコミュニティ活動は、市や自治会の先導によるコミュニティ活動であり、彼らを含めた地域住民が、何らかの必要性のために自発的に活動を起こさないのであれば、それはあくまでも「行事」や目的が不明瞭なチーム活動にとどまり、関係者の不満を募らせるものとなるであろう。例えば、回答Cの「ソフトボール団体が地域の行事に対して協力が多いきらいがある。」や、回答Dの「コミュニティ活動に参加するのではなく、あくまでもゲームがやりたくてチームに加入したのだ。」といった意見は、スポーツをすることが目的であるはずのスポーツ集団が、自治会の行事や仕事でありしかも任意参加であるはずのコミュニティ活動に参加や協力をさせられる矛盾に、スポーツ集団の本来あるべき姿を訴えようとし、また、回答Eにおける顧問扱いのみで直接にはコミュニティ活動には参加しない

市議員への批判、あるいは回答Fのように自分達を「便利屋」と称し、一般市民と一步距離を置いた状態からコミュニティ活動に協力しない者たちを批判している意見は、主として「とうちゃんソフトボール」団体の参加や協力なしには展開していくことのできない同市のコミュニティ活動の現状を改善すべきであると訴えているものと思われる。こうした関係者の意見は、明らかにコミュニティ活動への「不満」や「負担」を感じさせるものであり、またレクリエーション・スポーツの集団であるはずの「とうちゃんソフトボール」団体が、現在では行政の下請け的な組織となり、地域の様々なコミュニティ活動に疑問を抱きながらも協力している現状には矛盾さえ感じられる。

はじめは純粋にスポーツ活動を楽しむために集まった近所の仲間が、次第にその数を増していき、スポーツ活動を円滑に行うために組織化される。このような組織がそうした本来の目的を遂行することのみにとどまらず、行政の先導する地域の様々な「コミュニティ活動」に不本意ながら巻き込まれる。同市の行政がコミュニティ活動を展開していく上で、「連絡協議会」を組織の核とし約2000人の成員を有する「とうちゃんソフトボール」組織は、極めて利用しやすい組織としてあるようだ。

4. 要約と結語

大府市の「とうちゃんソフトボール」参加者を対象に、コミュニティ活動の協力実態を中心に研究を進め、以下のような結果を得た。

- 1) 「とうちゃんソフトボール」チームは、市や自治会の主唱するコミュニティ活動にかなり高い頻度をもって協力している傾向が認められたが、それは主に、同市や自治会の協力依頼によるものであった。この行政側の「連絡協議会」組織を連絡ルートとして利用した、どちらかといえば一方的な協力依頼は、一部の「とうちゃんソフトボール」関係者に不満をもたらしている。
- 2) 連絡協議会を組織の中心とし、約2000人の成員を有する「とうちゃんソフトボール」組織は、その動員率の高さから、市や自治会がコミュニティ活動を展開していく上で、最も重要な支援団体として位置づいている。

コミュニティ活動とは、本来、地域住民がそれぞれのニーズに応じて、自発的に行う活動であるが、

現実場面では、地域の行政活動や自治会活動の行事日程の消化という形態の下で行われる地域の年中行事が実質的な中身である場合が多い。こうした条件において大府市の事例に見られるように、フォーマルな形を整えた地域のスポーツ集団が、そうした「コミュニティ活動」への動員に際して、利用しやすい組織として捉えられるのは、殆ど宿命的なことであるといえるのかも知れない。

14) 守能信次「わが町のとうちゃんソフトボール」
(月刊社会教育346号 国土社 1985) 32~37ページ

文献

- 1) 正貞彦ら「地域における運動グループの運営について」(昭和52年 東海大学体育学部紀要73~81ページ)
- 2) 川西正志ら「愛知県下の地域スポーツクラブの集団的特性に関する研究」(昭和54年 中京大学体育学研究 1~18ページ)
- 3) 中島豊雄「地域スポーツ集団の社会学的研究」(昭和47年 名古屋大学紀要 59~84ページ)
- 4) 細川馨ら「社会人のスポーツクラブの存立要因に関する分析的研究」(昭和50年 大阪体育大学紀要 43~51ページ)
- 5) 湯谷登ら「市民スポーツクラブ安定化要因についての研究」(日本体育学会27回大会号 昭和51年) 329ページ
- 6) 中島豊雄「地域スポーツ集団の存続と変容、津市婦人バレーボールクラブの事例研究」(総合保健体育科学 第3巻1号 昭和55年 名古屋大学総合保健体育科学センター) 81~97ページ
- 7) 金崎良三「スポーツクラブの日常活動を規定する要因の分析」(昭和56年 九州大学健康科学紀要)
- 8) 海老原修ら「コミュニティ・スポーツの社会的機能について」(昭和56年レクリエーション研究) 41~50ページ
- 9) 中島豊雄ら「地域におけるスポーツクラブの社会的機能に関する研究」(昭和58年 名古屋大学総合保健体育科学第3巻1号) 143~155ページ
- 10) 籾野豊ら「スポーツクラブの社会的機能に関する研究」(昭和59年 筑波大学体育科学系紀要)
- 11) 藪田恭一「現代コミュニティ論」(東京大学出版会 1978年) 9ページ
- 12) 松原治郎「コミュニティの社会学」(東京大学出版会 1978年)
- 13) 岡田真「コミュニティ・ワーク論 - 地域づくりのノウハウ -」(大明堂 昭和56年)